

美の存在と発見

美の存在と発見

川 端 康 成

V.H.ビリエルモ訳

美の存在と発見

定価 380円

昭和44年7月15日印刷

昭和44年7月25日発行

著 者 川 端 康 成

訳 者 バルド・H・ピリエルモ

装 幀 杉 山 寧

発 行 者 星 野 慶 栄

発 行 所 毎 日 新 聞 社

郵便番号 100・東京都千代田区竹平町1

郵便番号 530・大阪市北区堂島上2-36

郵便番号 802・北九州市小倉区紺屋町7-207

郵便番号 450・名古屋市中村区堀内町4-1

印 刷 図 書 印 刷

製 本 大 口 製 本

〈検印省略〉

目 次

美しいハワイの川端先生

ジョン・ヤング

美の存在と発見 9

編集註記 69

Introduction John Young

The Existence and Discovery of Beauty (13)

translated by V. H. Viglielmo

著者・川端康成氏は、明治三十二年六月十一日

大阪市で生まれた。幼時に両親を失い孤児となる。

中学二年生のとき小説家を志す。一高から東大国文科を大正十三年に卒業したが、在学中『招魂祭一景』で文壇にデビュー、同人雑誌『文芸時代』によって、

新感覚派運動に加わる。『伊豆の踊子』『浅草紅団』

『抒情歌』『禽獣』『雪国』『名人』などが戦前の代表作。

戦後は『千羽鶴』（昭和二十六年度・芸術院賞）

『山の音』（第二回野間文芸賞）『みづうみ』『眠れる

美女』（第十六回毎日出版文化賞）などがある。中

でも『伊豆の踊子』『雪国』『千羽鶴』『眠れる美女』

『古都』などは外国でも翻訳出版された。

また昭和二十三年から十七年間、日本ペンクラブ

会長として活躍、この間、昭和三十二年、東京で開

催した初の国際ペン大会に功績があった。フランス

政府から芸術文化勲章を受けた。芸術院会員で、菊

池寛賞（三十三年）、文化勲章（三十六年）も贈ら

れ、昭和四十三年、ノーベル文学賞を受賞した。四十

四年六月、ハワイ大学から名誉文学博士号を授与さ

れ、アメリカ芸術文化アカデミー名誉会員となる。

訳者・バルド・H・ピリエルモ氏は、一九二六

年、アメリカ・ニュージャージー州に生まれた。

一九四八年、ハーバード大学（東洋語学部日本文学

専攻）卒業後、日本に来て明治学院大学で三年間教

えた。一九五二年、ハーバード大学の修士号をと

り、一九五三年から五五年まで東大、学習院大学に

留学。一九五六年、ハーバード大学の博士号（博

士論文の題「晩年の夏目漱石・その芸術と思想」を

得た。一九五八年までハーバード大学で日本文学を

教え、五八年から六〇年まで国際基督教大学・兼東

大講師として、比較文学を教える。一九六〇年から

六五年までプリンストン大学で助教授。一九六五年

から現在までハワイ大学教授として、アジア太平洋

言語学部で現代日本文学を教えている。

一九五七年九月に東京で開かれた国際ペン大会の

閉会式には、川端・日本ペンクラブ会長の閉会の辞

を通訳した。

翻訳の主なものには、夏目漱石の『明暗』―近刊

予定―、西田幾多郎の『善の研究』、岡崎義恵の『明

治文芸史』などがある。

美しいハワイの川端先生

ジョン・ヤング

マノアの谷間にあるハワイ大の校庭には、いろいろな熱帯植物が茂っている。折しも降りしきる春雨にヤシの葉はひそかにざわめいている。山の端には月がかつていない。

スポールディングの大教室はホノルル各地から集まった五百人あまりの聴衆で埋まった。一世の老人、ブロンドの少女、家庭の主婦、深刻な顔をした学者、三世の日系青年など、色とりどりである。皆、川端先生の最初の公開講義を聞くためにきたのである。そして二時間あまり、先生のお話の美しさに魅せられ、先生の人柄の親しさに陶醉し、川端美学の三昧境に浸った。一九六九年五月一日である。

川端先生の訥弁は有名であると人はいう。なるほど、ボソリボソリと原稿をお読みになるのを側から見ていると、いかにもおつらそうである。それにもかかわらず、聴衆は先生のほほえみに口元をほころばせ、先生のユーモアに笑いをもって応

え、先生の描き出す美に恍惚する。実に和やかな風景である。実に魂と魂が完璧に解けあったふんいきである。これほどのむずかしい内容のものを、これほど楽しく聴衆に聞かせる伎倆は他にその例を見ない。否！ 伎倆ではない。先生の人柄である。先生の慈愛に満ちた美しい人格である。聴衆は先生の説く美の存在に目覚め、先生の指摘される美の発見に驚きの目をみはった。コップに反映する日の光！ そこには美があつたのだ！

ハワイ大学のアジア太平洋言語学部は、数年前にすでに日本の文化界の人をハワイにおよびする企画をたてた。万難を排して日本ペンクラブとの提携で、ポップ・プログラム (POP Program) として発足した。ポップは Professor of Professors の略称である。それ以来二年半、塩田良平先生、井上靖先生、瀬沼茂樹先生、金田一春彦先生、中村光夫先生、五島茂先生をもうすでにおむかえた。その一人として川端先生はいらっして下さったのである。

この企画を始めた理由は極めて簡単である。ある一つの国民を理解するためには、その国民とまじわらなければならない。ある一つの文化を体得するためには、その文化に直に触れなければならない。日本文化を自らの血とし肉とし、その一言一動

において文化の香りの滲み出ている人が、ハワイに一定期間滞在することにより、ハワイの人たちは日本文化を体得するきっかけをもつ。

少数民族としてアメリカに生活する日系市民を多数擁するハワイには、ことにこの企画は必要である。少数民族は多数民族の厄介物であってはならない。多くの民族が住んでいるアメリカの一市民として、少数民族は自尊心をもって生きていかなければならない。自己の祖先に残してくれた文化遺産に誇りを感じ、それによってアメリカの文化生活を豊富にしていく努力と、それを可能ならしめる自信とがなければならぬ。その自尊心、その自信力をたかめる方法の一つがこの企画である。ポップ・プログラムでこられた諸先生方は *SJR* という称号によって呼ばれている。*Scholar-in-Residence* の略称である。また先生方にさしあげた愛称でもある。

川端先生の第二回目の公開講義は、約二週間後の五月の十六日に、ヒロ市にあるハワイ大の分校で行なわれた。分校長・野田薫博士のお心尽くしによる。カフェテリアに集まった三百あまりの聴衆は、立錫りつきの余地もないほど、あまたな色のアロハシャツやムームーで会場を色どってしまった。まるで夜空を飾る虹のようだ。前回と同じく、ビリエルモ教授が通訳にあたった。小山敦子教授が翻訳をほとんど

徹夜で助けた。いつもの如く、川端先生は間際に原稿を渡して下さったからである。三日月は夜空におぼろげである。それと美を競うが如く、先生の講義は聴衆の心を奪った。聴衆を美の境地へ誘った。誠に見事である。かくて第二回目の「美の存在と発見」と題する公開講義は第一回目のマノア本校におけるのと同じく、大成功裡に終わった。しかし、その意義するところのものは何であらうか？

川端先生はハワイに存在する美をいたる所で発見され、ハワイの私たちに示して下さった。日本の美のある所を私たちに懇懇と説いて下さった。美の存在を確認し、それを発見できる人はしあわせである。私たちもそういう人になりたいものである。

一九六九・五・二二

（ハワイ大学アジア太平洋言語学部主任教授）

美の存在と発見

裴 幀 杉 山 寧

口 絵 撮 影 米 津 孝

わたくし、カハラ・ヒルトン・ホテルに滞在して、二月ふたつき近くなりますが、朝、浜に張り出した放はなち出しのテラスの食堂で、片隅の長い板の台におきならべた、ガラスのコップの群れが朝の日光にかがやくのを、美しいと、幾度見たことでせう。ガラスのコップがこんなにきらきら光るのを、わたくしはどこでも見たことがあります。やはり日の光りが明るく、海の色があざやかであるといふ、南フランス海岸のニイスやカンヌでも、南イタリアのソレント半島の海べでも、見たことがあります。カハラ・ヒルトン・ホテルのテラス食堂の、朝のガラスのコップの光りは、常夏の樂園といはれるハワイ、あるひはホノルルの日のかがやき、空の光り、海の色、木々のみどりの、鮮明な象徴の一つとして、生涯、わたくしの心にあるだらうと思ひます。

コップの群れは、まあ出動態勢の整列できちんと置きならべたさまなのです

が、みな伏せてありまして、つまり、底を上にしてありまして、二重三重にかさねたのもありまして、大きい小さいのもありまして、ガラスの肌が触れ合ふほどのひとかたまりに揃へてあるのです。それらのコップのからだまるごとが、朝日にかがやいてゐるではありません。底を上にして伏せた、その底の円い縁のひとところが、きらきら白光を放ち、ダイヤモンドのやうにかがやいてゐるのです。コップの数はいくつくらゐでせうか、二三百はあるでせうか、そのすべてが底の縁の同じところを同じやうにかがやかせてゐるわけではありませんが、かなり多くのコップの群れが、底の縁の同じやうなところに、かがやく星をつけてゐるのです。コップの行列が光りきらめく点の列を、きれいにつくつてゐるのです。

ガラスのコップの縁の、このきらめきに目を澄ましてゐるうちに、コップの

胴のひとつところにも朝日の光りの宿るのが、私の目にうつつて来ました。これはコップの底の縁のやうに強いかがやきではなくて、ほのかにやはらかな光りであります。光線の燦々なハワイでは、日本風にいふ「ほのか」はあてはまらないかもしれませんが、底の縁の光りが点からかがやきを放つてゐるのとはちがつて、胴の光りはやはらかく面に、ガラスの肌に、ひろがつてゐるのです。

この二つの光りは二つとも、いかにも清らかに美しいのでした。ハワイの豊かに明るい太陽、爽かに澄む大気のせるであります。片隅のテーブルの上に用意した、ガラスのコップの群れに、このやうな朝日の光りを発見し、感得しましたあとで、目を休めるやうにテラス食堂をながめると、すでに客のテーブルにおかれて、水と氷を入れてあるコップ、そのガラスの肌にも、ガラスのなかの水と氷にも、朝の光りがうつつたり、さしこんだりして、さまざまに微妙

な明りをゆらめかせてゐました。氣をつけなければ氣がつかないほどの、この光りもやはり清らかに美しいのでした。

朝の日の光りにガラスのコップが美しく映えるのは、ハワイのホノルルの海辺に限つたことではないでせうと思はれます。南フランスの海辺でも、南イタリアの海辺でも、あるひは日本の南方の海辺でも、カハラ・ヒルトン・ホテルのテラス食堂でのやうに、コップのガラスの肌に、明るく豊かな日の光りがうつるのかもしれない。また、ホノルルの日のかがやき、空の光り、海の色、木々のみどりを、ガラスのコップのやうなつまらないもの、なんでもないものに、鮮明な象徴を見つけないでも、ハワイの美しさを象徴するいちじるしいもの、よそにたぐひのないものは、もちろん、幾らもありますでせう。色のあざやかな花々、姿よく茂る木々、それから例へば、わたくしはまだ見る幸ひに

恵まれてゐないものですが、沖のひとところだけに降る雨に真直ぐに立つ虹、月の暈かさのやうに月を巻く円い虹など、めづらしい景物もあります。

しかしながら、わたくしはテラス食堂で朝の光りによる、ガラスのコップの美しさを見つけたのです。確かに見たのです。この美しさに、はじめて出合つたのです。これまでにどこでも見たことがないと思つたのです。このやうな邂逅こそが、文学ではないのでせうか、また人生ではないのでせうか、と言へば、飛躍に過ぎ誇張に過ぎませうか。さうかもしれませんが、さうでもないでせう。今まで七十年の人生で、ガラスのコップのこのやうな光りを、ここではじめて、わたくしは発見し、感得したのです。

ホテルの人はガラスのコップをきらめかせる、その美的な効果を計算して、その場においたのでは、おそらくないでせう。わたくしが美しいと見たことな

ども、知つたことではないでせう。そしてまた、私自身もその美しさをおぼえ過ぎて、今朝はどうかなどといふ心の習はしにとらはれて、朝のガラスのコップをながめますと、もういけません。もつとも、詳しくはなります。底を上にして伏せた、その円い底のひとところに、きらめく星をつけてゐると、わたくしは言ひましたが、そのち度重ねてながめてみますと、見る時間によつて、見る角度によつて、光りの星は一つではなく、幾つもあることがありました。底の縁だけではなく、コップの胴にも光りの星がついてゐることもありました。それでは、底の縁に星一つとしましたのは、わたくしの見まちがひ、思ひちがひであつたのでせうか。いや、一つの時もあつたのです。幾つもの星のきらめく方が一つの星だけよりも美しさうでもあります。わたくしには、はじめに一つの星と見て美しかつた方が美しいのです。あるひは、文学にも人生にも、